



## 行動や事象を多面的・多角的に捉える

例えば、こんなシチュエーションを目撃したとします。車いすに乗っている子供がいます。その子は、ある人（仮にA氏とします）の6mほど先のところを1人で移動しています。ふと見ると、車いすの車輪が通路の溝にはまって進めなくなってしまうと。子供は何とか溝から抜け出そうと、あれこれ試行錯誤しています。そのことに気付いたA氏がとった次の行動について、あなたは、どのように感じるでしょうか？

- (1) すぐに助けに行く (2) しばらく様子を見守る (3) その場を立ち去る

よほど抜き差しならない、可及的速やかに解決すべき問題を抱えている場合を除き、多くの人にとって、A氏が(3)の行動をとることについては、『許せない』と感じるものと思われます。そして、心ある大多数の人にとって、A氏に求めるのは(1)の行動ではないかと考えます。困っている人がいたら助けましょう、という社会的通念に立てば、そうした選択がされるかと思うからです。

ここで問題になるのは(2)です。この場面で、A氏が(2)の行動をとった場合、あなたはどのように感じるでしょうか？

小・中学校において、「道徳」が教科となったのは、学習指導要領が一部改正された平成27年以降です。「特別の教科『道徳』」では、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自らを見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自らの生き方についての考え方を深める学習を通して、道徳的な判断力や心情、実践意欲と態度を育てることがねらいとされ、そのねらいに迫るために、「考え、議論する道徳」への学びの質的転換が図られました。

わたしたちの生きる世界の事象は、決して一面のみから判断できるものばかりではなく、より多様で、複雑で、混沌とさえしています。道徳科の学習では、そのような事象を自分のこととして捉えながら、様々な角度から見つめ、考え、周りの仲間と意見しながら自らの人生を豊かなものにしていくために必要なことを学んでいきます。

前述の(2)問題ですが、このシチュエーションを授業で扱う場合、子供たちからは次の2つの意見が出てくることが予想されます。

①「その子を放っておくなんて、やっぱりひどい。困っている人がいるのならば、すぐに助けに行くべきだと思う。」

②「A氏は、その子が自分の力で困難を乗り越えられるのを見守っているのだと思う。将来、自分の力でできることが増えるようになってほしいという思いをもっているのかもしれない。」

①と答えた子も、②と答えた子も、きっとどちらも正解なのだろうと思います。だからこそ、①と答える人の心情も、②と答える人の心情も、どちらも理解できるような人でありたいと思います。

何気ない日常の中で繰り広げられている人々の行動、起こっているさまざまな事象、それら1つ1つに目を向けるとき、多面的・多角的に捉え、思考し、判断できる大人でありたいと思います。そして、子供たちに、「これについては、どう思う？」と、語りかけられるような大人でありたいものだと、思います。

(指導参事 堤 雅宏)